



東京ミッション研究所ニュース

第 91 号
2021 年 6 月発行

〒189-8512 東京都東村山市廻田町 1-30-1 東京聖書学院内
TEL/FAX 042-396-5597 郵便振替 00150-5-29091



「現場から問われる神学」再考

中島真実 基督兄弟団一宮教会牧師、東京聖書学院講師、
関西聖書神学校講師、東京ミッション研究所理事

2020 年 10 月、TMRI 30 周年記念論文集として『平和をつくり出す神の宣教』が出版されました。寄稿者の一人として、この論文集が多くの方に読まれることを切に願う次第です。もちろん、読者の皆さんには各々の関心分野とアプローチがあり、その観点(聖書解釈、教義学、倫理学、宣教学など)から本書の論考に入っていただけでも一つでしょうが、学問上の縦割り式分類を超えて、各論考を貫く全体の方向性を読み取っていただけるならば、誠に幸甚に思います。

さて、そのように本書を貫く方向性も様々に表現できるでしょうが、ここで述べてみたいのは、副題である「現場から問われる神学」の意味するところです。それは、数ある神学の中のオプションの一つを例示しているのでしょうか、あるいは、神学そのものの学的態度への抜本的な問いかけをしているのでしょうか。つまり、「現場から問われる神学」もあれば「そうでない神学」もあって、「みんな違って、みんないい」ということなのでしょうが、それとも、神学とは宣教の現場からの問いかけに向き合うことを本意とするものではないのかという挑戦的な提案なのでしょうが。確かに、こうした二択の設問は若干恣意的に感じられるものの、テーマ再考の仕掛けとして有意義なものと言えるでしょう。

そこで、筆者のことで恐縮ですが、これについて自らの思索遍歴を辿ってみると、神学が主張

する普遍性と生ける神の行為の相関を如何に捉えるかという一筋の課題が見えてきます。日本では肩身の狭いキリスト者、中でも少数の牧師家庭で育ち、同じくキリスト者になった者として、筆者はキリスト教信仰の普遍性を明確に主張したいという思いを青年期より持っており、さらに、説教者になるべく神学校で学び始めた頃には、その思いは尚も強くなっていました。ドラマ『水戸黄門』の印籠のような、いきなり誰にでも決定的に通用する論理と言葉を求めていたわけです。ところが、学びゆく中で、筆者の想定してきた普遍性と実際に神学で語られる普遍性とは違うのでは、という問題意識が開かれてきたのです。TMRI の初代所長 R. リー博士より普遍概念も歴史的産物の刻印を帯びているのではないかと問われて触発され、T. フィンガーの教義学より宣教と文脈の相関を見つめる終末論的思索を学び、さらに J. H. ヨーダーの著作から、教会が置かれた実社会において現場からの問いかけに信仰告白の深みから応答を見出して、信仰告白の意味の豊かさが開かれていく会話プロセスの重要性を教えられてきました。

確かに、神学は神についての学びであり、説教は神の言葉の語りであるので、そこで創造主である神の普遍性を念頭に置くのは間違いありません。しかし、それは『水戸黄門』の印籠の如く現場の問いを黙らせる声高な普遍概念とは異なり、歴史を共に旅しながら現場にて「良い知らせ」を告げる神の生ける開放的な姿・・・(5 頁に続く)

Perspectives from Mission of God the Peacemaker

東京ミッション研究所 創立30周年を迎えて

金本 悟*

東京ミッション研究所が創立 30 周年を迎える。主に感謝したい。価値観には、時代と共に変化するものと、時代を超えて普遍的に残るものがある。東京ミッション研究所は、時代と共に変化するべきものと普遍的な価値観を識別して、今の時代にふさわしい宣教のあり方をこの 30 年間模索してきた。

去年は、日本の元号が「平成」から「令和」に変わった。今年の 3 月 11 日には、世界保健機構(WHO)が、「新型コロナウイルスはパンデミックになった」との宣言を発表した。昨年末に中国の一都市で始まった感染症が3カ月で世界中に広がり、パンデミックになるというグローバル化の時代に私たちは生きている。そして、東京ミッション研究所は、この国際社会における宣教学的の思惟を探り求めている。

東京ミッション研究所が設立された時は、「昭和」から「平成」へと元号が変わった時代であった。東京ミッション研究所の薦書シリーズ No.1は、『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』であり、日本文化の中心的アイデンティティとしての天皇制と向き合いながら宣教についての考察を続けてきた。

■ 東京ミッション研究所の使命

ロバート・リー初代所長(所長在任、1989 年 12 月～2003 年 8 月)は、東京ミッション研究所所報第1号で「Tokyo(東京)」「Mission(ミッション)」「Research(研究)」「Institute(所)」の言葉の意味

* アジア太平洋神の教会連盟委員長、大泉ぶどうの木教会牧師、社会福祉法人神教福祉会・神の教会保育園園長、東京ミッション研究所理事、日本宣教会副会長。この内容は、TMRI 創立 30 周年記念論文集『平和をつくり出す神の宣教』の序章からの抜粋。

を解説している。リー師は、近代の歴史において東西文明が衝突し交流する都市である「Tokyo(東京)」は、近代化の結果として地球上の多くの地域がグローバル化された結果、文明の衝突の最前線になってしまったとの見方を持っておられた。その「Tokyo(東京)」で、「Mission Research(ミッションの研究)」をすることは、最前線の現場での宣教学であり、その事をなすうる研究所を設立するという志がリー師に与えられた。そして、その最前線である東京で宣教学を実践できるように、「Research Institute(研究所)」が設立された。

昭和から平成へ元号が変わった時は、重苦しい雰囲気や自粛が満ちていた。去年の令和への改元時には、祝賀ムードが満ちていた。それにはいろいろな要因があるであろう。一つには、前天皇の崩御に伴う新天皇の即位と前天皇の譲位に伴う新天皇の即位の差があげられよう。次に、昭和の時代には戦争があったが、平成の時代にはなかったという事実もあるであろう。さまざまな要因による影響は日本人及び日本に住む人々に影響を与え、時代によって異なる宣教学的な課題に私たちは直面することになる。

今日、私たちは高度に発展したテクノロジーによってグローバル化された世界で生活し、インターネットなしの生活は考えられなくなってきた。地球温暖化を始めとする気候変動に伴う大規模自然災害の多発や、新型コロナウイルスの世界的感染、さらに家族制度や社会制度などの変化に伴う子どもたちの養育や教育への対応など宣教学的な課題も飛躍的に増大している。東京ミッション研究所では、これらの宣教学的な課題をポストモダン時代における宣教学的パラダイム形成の課題と位置づけて取り組んできた。これからも時代の変化とともに、東京ミッション研究所は、

キリスト教的立場に立って、宣教学的課題に取り組んでいく。

■ 東京ミッション研究所の歴史

東京ミッション研究所は、設立の準備を1988年から開始した。1989年9月には、宣教学者のウィルバート・シェンク師のフォーラム、第1回日本宣教研修ツアー(伊勢:千代崎秀雄師を団長とする宣教ツアー)を経て、1989年12月に東京都東村山市にある日本ホーリネス教団東京聖書学院内に設立された。設立時の主要メンバーは、評議員会議長に鍋谷堯爾師、理事長に小林和夫師、所長にロバート・リー師、副所長に齋藤孝志師、総主事に金本悟という布陣であった。

東京ミッション研究所は、ロバート・リー初代所長の指導の下で、福音派の伝統を大切にしながらも、福音派以外のキリスト教の伝統や他宗教にも開かれたセミナーやフォーラムを開催してきた。OMS International(旧 東洋宣教会)及びアズベリー神学校の教授陣、また、メノナイト教会及び神学校の教授陣を含めた多くの内外からの講師が東京ミッション研究所を訪れ、宣教学的な対談を通じて交流を深めつつ、研究を行い、宣教学、平和学、実践神学などの書物を出版し、講演会を開催してきた。

リー師は、講演会の講師としてデイヴィッド・ボッシュ師を招聘した。ボッシュ師は、南アフリカ生まれで、宣教学と神学を学ぶためドイツやスイスに留学しオスカー・クルマン師のもとで、博士号を取得された。その後南アフリカに戻り、オランダ改革派教会の神学者として活躍し、白人でありながら、アパルトヘイトに反対の立場を貫かれた宣教学者である。ボッシュ師は東京ミッション研究所の招聘を受け入れ、来日を楽しみにされていた。しかしながら、来日直前の1992年4月に、交通事故で天に召されてしまった。その後、ボッシュ氏が1991年に出版したばかりで、世界的に高い評価をうけた *Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission* を翻訳する計画が持ち上がった。神戸ルーテル神学校の鍋谷堯爾師や東京ミッション研究所の関係者を中心に、カトリック宣教研究所の小田武彦師

の協力も得て出版することになり、西岡義行主事の下で、カトリックやプロテスタントを問わず多くの方々に分担翻訳していただいた。そして、新教出版社から『宣教のパラダイム転換』(上:1999年11月刊行、下:2001年3月刊行/選書シリーズ No. 3、No. 4)が出版された。この本は、日本の宣教学に大きな影響を与え、この本の出版により、東京ミッション研究所は、日本のキリスト教界に認知される研究所となった。さらに、この共同作業を通して培われた交流や信頼関係が基礎になって日本宣教学会設立の機運が具体的になっていった。神様の導きは私たち人間には計り知れないものがある。

『宣教のパラダイム転換』の出版をきっかけに、東京ミッション研究所は、ポストモダンへのパラダイムシフトが近い将来起こり得ることへの備えとしての研究を深め、アラン・クライダー著『聖をめざす旅』(選書シリーズ No. 6)、ウィラード・スワートリー『平和の契約』(選書シリーズ No. 11)などを続けて出版した。また、ジョン・ハワード・ヨルダーの『愛する人が襲われたら?』(選書シリーズ No.8)を出版するとともに、ヨルダー研究会を立ちあげ『ジョン・H・ヨルダーの神学』(新教出版社2010)を出版した。

リー師の功績として、アジア神学大学院・日本校(Asia Graduate School of Theology/ Japan、略称 AGST/J)での働きも記憶に留めておきたい。アジア地域にある福音的な神学校が互いに連携をとり、アジアの教会の働き人をアジアで教育できるように1970年にアジア神学協議会(Asia Theological Association)がシンガポールに設立され、多くの神学校が加盟している。

各国に支部があり、日本支部では、福音派の神学校6校が協力して、アジア神学大学院/日本を組織し、学びを修了した者に、神学修士(Th. M.)、牧会学博士(D. Min.)、神学博士(Th. D.)の学位を授与できる体制を整えた。リー師は、このアジア神学大学院・日本校で長年教鞭をとられ、東京聖書学院を含む多くの福音派の働き人や神学校教師を育ててくださった。

また、宣教の実践の分野では、イースタン・メノナイト大学に設立された Institute of Conflict

Resolution(後の Institute of Conflict Transformation)の設立者である、ロナルド・クレイビル師を招き「平和セミナー・牧会者セミナー」を開き、教会内にも紛争地域にも共通する紛争を平和作りに転換していく示唆を提供することができた。

リー師は、日本宣教学会の設立に向けて、東京ミッション研究所、関西ミッション・リサーチ・センター(神戸ルーテル神学校を含む)、福音聖書神学校、大阪キリスト教短期大学、東京キリスト教短期大学(共立基督教研究所を含む、現、東京基督教大学)との連携を模索されていた。

リー師の所長退任後に私が第二代東京ミッション研究所所長(在任、2003年9月～2015年3月)に任命された。私は、リー師の意思を受け継いで、日本宣教学会を起ち上げる働きを継続し、2005年8月に同学会の設立総会が早稲田奉仕園において行われた。また、日本宣教学会設立当初、その事務局を東京ミッション研究所内に設置させていただけたことも感謝なことであった。

この学会はすでに15周年を迎えている。事務局も、日本聖書神学校、清泉女子大学、東京ミッション研究所、東京基督教大学と持ち回っており、総会は、早稲田奉仕園、東京ミッション研究所、日本聖書神学校、清泉女子大学、カトリック幼きイエス会ニコラバレ、関西学院大学、上智大学、カトリック麴町聖イグナチオ教会岐部ホールなどで開催されてきた。2020年度の総会は、関東学院大学を会場として開催される予定である。今では、福音派、日本キリスト教協議会(NCC)系、カトリック系のそれぞれが共に研鑽しあいながら宣教学の学びを共にしていく学会として発展している。

リー師の主張でもある、近代化の結果としてのグローバル化は、ポストモダン時代を生み出すことを踏まえて、実学及び研究を行っているローザンヌ運動との連携を深めた。その結果、東京ミッション研究所は、2010年10月に行われた第3回ローザンヌ会議(南アフリカ共和国ケープタウン市)のための参加準備を、関西ミッション・リサーチ・センターと共にいき、会議後に正式発足した日本ローザンヌ委員会の事務局も東京ミッ

ジョン研究所内に設置させていただくこととなった。第3回ローザンヌ会議は、1910年に開催された第1回宣教会議であるエディンバラ国際会議の100周年を記念して開催されたものである。…中略…

リー師は宗教社会学を中心に仏教学や日本の美学などをハーバード大学で学ばれた方であり、ボストン大学には宗教社会学や仏教学を教えるために招聘されていた。リー師は、ボストン大学に来る前に、アマースト大学やテネシー大学での教師としての実績がある方であったが、日本での宣教師としての経験もあり、お子様方三人はみな日本生まれであった。そのようなこともあって、私たちも家族ぐるみのお付き合いをさせていただいた。リー師のハーバード大学での博士号の学位論文は、日本人の個性(individuality)の研究であった。リー師は、聖徳太子から、鎌倉仏教の教祖たち、内村鑑三、戸田城聖等の著作を日本語あるいは漢文の原文で読みこなすことができるほどの語学力のある方であり、日本人の中で「個」を確立した人々の著作を通して、日本人の「個」の在り方を探られている研究者であった。リー師とのボストンでの出会いは2年ほどであり、その後、リー師はテキサス州のサザンメソジスト大学に転任された。リー師の後任には、宗教社会学者のピーター・バーガー教授がボストン大学に招かれた。

私は、1985年から東京キリスト教短期大学で「自然科学思想史」や「宗教社会学」を教える機会が与えられた。その頃、日本メノナイト協議会方南町教会の牧師であられた本間正己師から、「ロバート・リー師があなたを探している」との連絡を受けた。当時、リー師は明治学院大学国際学部開設のために大学教授として招かれ、神奈川県に住んでおられた。私は、当時東京キリスト教短期大学で教えながら同大学附属の共立基督教研究所(宇田進所長)に関わっていたので、リー師を宇田進師に紹介させていただいた。また、東京聖書学院教授であった齋藤孝志師にも同師を紹介させていただいた。そのことが契機となって、リー師は、明治学院大学の大学教授として宗教学を大学生に教えるよりは、将来の牧師た

ちに対して神学及び宣教学を教えることを選ばれ、東京聖書学院の客員教授として赴任して下さることとなった。

振り返ると、松村悦夫師が日本ホーリネス教団委員長時代の時代に私を東京聖書学院の講師として招いてくださり、松木祐三師が教団委員長、小林和夫師が聖書学院長の時代にリー師を客員教授として迎えてくださった。神様が、ロバート・リー師、齋藤孝志師、松木祐三師、千代崎秀雄師、小林和夫師と共に私をも東京ミッション研究所に導いてくださった。

齋藤孝志師の「宣教者」としての宣教学的な情熱が東京ミッション研究所設立の前史として大きな貢献をなしているのではあるが、小林和夫理事長の貢献も多大である。齋藤孝志師の東京ミッション研究所への思いを支え続けられ、若手教役者の人材養成に努められた。私もプリンストン神学校への推薦状を書いていただいた。若手を育てたいという使命感は、小林師とロバ

ート・リー師に共通しており、お二人の友好関係が、松木祐三師を含めて日本ホーリネス教団をして東京ミッション研究所を支え続ける原動力となっていたことを記させていただきたい。

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

※ 卷頭言より続く……

を意味するのであろうと考えます。実際に説教者となり、現場で牧会する者となって、この実感は尚も強められています。確かに、そのように普遍性を捉えるからといって、現場での問いや要求に対して信仰告白まで安く売り飛ばして、それを相対化する態度になると、説教も宣教もあり得なくなってしまうので、それは論外でしょうが、信仰告白をもって現場の問いに向き合い、そこで生ける神が何をなさるかを見つめて描く視座を大切にしたいと考えています。

新刊書のご案内

『平和をつくり出す神の宣教 —現場から問われる神学』

Mission of God the Peacemaker



故ロバート・リー博士によって 1989 年に設立され、日本における福音宣教が持つ今日的課題に真摯に取り組んできた東京ミッション研究所。その設立 30 周年を記念した、弟子たちによる気鋭の論文集。(帯より)

序章 東京ミッション研究所 30 周年を迎えて 金本 悟
第1章 古代エルサレムから近代東京へのパラダイム転換
—ボッシュより更なる展開へ ロバート・リー
第2章 平和神学の基盤としての聖書学的枠組み 宮崎 誉
第3章 修復的贖罪論の可能性を探る—パウロ神学の
「新しい視点」から 河野克也
第4章 グレン・スタッセンの「受肉的弟子の道」の
位置と展望 中島光成
第5章 スタンリー・ハワーワスの「近代的自己」批判—カント
道徳神学における聖化との対比において 中島真実

第6章 終末的苦難のなかでの世界宣教とイエスの弟子育成
—マタイ福音書におけるイエスの弟子共同体を中心に 横田法路
第7章 被災地から問われる包括的福音—ローザンヌ運動の視点から 西岡義行

■ 定価税込 1980 円 出版記念特価 1500 円 (2021年8月末日まで)

■ 送料 1冊 200 円 2~4冊 400 円 5冊以上 500 円

TMRIからのお知らせ

◇冬季フォーラムの中止

- この2月に出版記念フォーラムを予定していましたが、コロナ感染拡大や書籍の対面販売が出来ないことなどから、開催を断念いたしました。

◇新理事の紹介

- 当研究所の新たな理事を紹介いたします。
中島真実氏： 基督兄弟団一宮教会牧師、東京聖書学院講師、関西聖書神学校講師、東海聖書神学塾教師。
南野浩則氏： 日本メノナイトブレザレン教団福音聖書神学校教務、日本メノナイトブレザレン教団石橋キリスト教会副牧師、大阪聖書学院非常勤講師。

◇夏季学校のお知らせ

- 来る2021年6月28日(月)～30日(水)に「平

和つくりの神学—現場から聖書に聞く」をテーマに夏季学校がZoomにて開催されます(東京聖書学院 HP から申込み可)。講師は片野淳彦氏および宮崎誉氏。詳しくはチラシ参照。

献金者名

2020.11.11～2021.5.15 (敬称略 *複数回)

- ◇団体：東京聖書学院、新井キリスト教会*、大泉ぶどうの木教会、鹿児島武キリスト教会*、一宮教会、標茶キリスト教会、保恵キリスト教会、蒲郡キリスト教会、厚木キリスト教会、大阪栄光教会、長井教会、OMS、日本メノナイトブレザレン教団
- ◇個人：児島康夫、水野節子、小林光生、金本悟、飯島延浩、萩生田明、千代崎聖子、西岡行雄、羽村真知子、池田洋一・恵子、和田忠三、金本史子、水間照弥、小関謙治、南野浩則、西岡義行、蘇基昊・丁敏任
* 尊い献金を心から感謝いたします。

◇◇◇◇◇◇◇ 東京ミッション研究所の関係書籍案内 ◇◇◇◇◇◇◇

- 『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』 ロバート・リー編 新教出版社 1815→1400円
- 『これからの日本の宣教—発想の大転換』 TMRI 編 いのちのことば社 2200→1500円
- 『宣教のパラダイム転換上・聖書の時代から宗教改革まで』 D. ボッシュ著 7370→6000円
- 『宣教のパラダイム転換下・啓蒙主義から21世紀に向けて』 D. ボッシュ著 8250→7000円
TMRI 訳 新教出版社 (上下一括割引 15600→12500円)
- 『日本と西洋キリスト教—文明の衝突を超えて』 ロバート・リー著 TMRI 訳 2940→2400円
- 『<聖>をめざす旅』 アラン・クライダー著 棚瀬多喜雄訳 東京ミッション研究所 3300→2500円
- 『社会を動かす礼拝共同体』 J. H. ヨーダー著 矢口以文・矢口洋生・西岡訳 TMRI 3080→2300円
- 『愛する人が襲われたら』 J. H. ヨーダー著 棚瀬多喜雄訳 TMRI 2100→1500円
- 『赦し—新しい人間関係を生み出す』 D. アウグスバーガー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 1700円
- 『イエスの平和を生きる—激動の時代に読む山上の説教』 グレン・スタッセン、デービッド・P・ガッシー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700円
- 『平和の契約—福音の聖書神学的理解』 ウィラード・スワートリー著 東京ミッション研究所訳 いのちのことば社 特別価格 7140→5000円 (まとめて買うとさらに割引が可能です。)
- 『敵対から共生へ—平和づくりの実践ガイド』 ジョン・ポール・レデラック著 水野節子・宮崎誉共訳、解説・片野淳彦、西岡義行 東京ミッション研究所 ヨベル社 1100円 → 800円
- 『ジョン・H・ヨーダーの神学—平和をつくり出す小羊の戦い』 ヨーダー研究会 (中島真実、矢口洋生、藤原淳賀、マーク・ネイション) 東京ミッション研究所 新教出版社 2090円 → 1700円
- 『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』 クリストファー・ライト著 TMRI 訳 いのちのことば社 第1巻 3080→2500円 第2巻 3410→2700円 第3巻 2980→2400円 全巻 9460→7000円
- 『イエスの足跡に従う—アナバプテテストの伝統』 A. スナイダー著 中川美弥子訳 矢口以文共訳 東條隆進監修 東京ミッション研究所 2000円 → 1500円
- 『社会に開かれた教会—地域の福音となる新たな一歩』 西岡義行、井上貴詞共編 いのちのことば社 (TMRI 協力) 1540円 → 1200円 (3冊以上は送料無料)

新刊 『平和をつくり出す神の宣教』 (創立30周年記念論文集) ヨベル社 1980円 → 1500円